

第664号

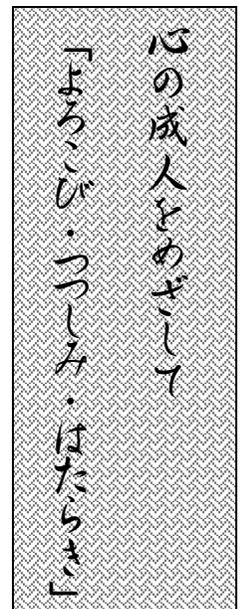
令和2年10月23日
題字は二代真柱様
大阪市北区池田町13-17
天理教はるのひ分教会

TEL・FAX
06-6358-2630

陽気ぐらしへ学びと試み
はるのひ館



▶はるのひホームページ▶
QRコード
▶天理教本部09-5429-1101▶



『場を創り高める』

昔から世の中に争いは絶えませんが、トランプ大統領となつてからアメリカ国内をはじめ

世界中にいつそう不和や抗争が広がり、旧ソビエト諸国などでは戦争にまで悪化するしまつです。

彼が大統領になつた当初、齒に衣着せない言い方を小気味よく思ったときもありましたが

地球温暖化に激しく警鐘を鳴らすグレタ・トゥーンベリーさんに対して、堂々と対決することなく

大人げない対立に終始したのにはまつたく失望しました。こんな人が世界をリードする国のトップでいいのだろうか？

彼はまるであおり運転のドライバーです。どの道も自分の道だと言い張つて走り回り、誰にでも突っかかってくる。

天理教教祖（おやさま）は「陽気暮らし」をめざすのが人間の楽しみであり目標であると教えられました。

例えば、今ここにまつたく見も知らない十人の人が居合わせたとします。

初めはうさんくさそうに疑つたりにらみつけたり、中には喧嘩する人もいるかも知れません。

そこで誰かが提案して「こんなことをしてはちつとも楽しくないし、しまいに滅ぼしあうかも知れない。

そうだ、半分ずつに分かれて、チーム対抗のゲームをすればどうだろう」と相談し実際に始まつたとします。

すると、その《場》は仲たがいの陰気な場から、相談しあうまとまりの場に、さらに互いに争う悲惨な場ではなく

共にチームワークを競う努力と協力のまさに陽気な場にレベルアップします。

このように陽気暮らしとは、「二人は皆のため、皆は一人のため」の場を創出しさらに高める苦心工夫の過程なのです。

九月次祭祭典講話

会長 芝 太郎

『世界観革命』

絶えざる意識化

今、優理が自分のことを振り返りながら教典の勉強をしてくれました。ちょうどよい機会になったね。彼女はその体験を忘れていたと言いましたが、忘れるにはもったいない話もったいない経験。忘れるというのは無意識になってしまうということなんや。しょっちゅう押入れの中を点検するように戸棚の中を点検するように、開けて何があつたかなと点検しないと無意識のまま忘れてしまつて、無いのと同じになつてしまう。

銀行の通帳でもそうですね、何千万円あつても忘れてしまつたらないのと同じです。百円でも通帳の中にあつて、それを通帳記入して百円まだであると意識化すると、百円はちゃんと使えるんです。でも何千万円預けてあつても忘れてしまつ

ていると、その何千万円はないのと同じ。使えない。

世界とそこに今生かされているというこの無限の財産、ふだんは当たり前になつて財産なんて全然思つていない、生命が危うくなつて始めて絶対手放したくない財産だと気づく、この無意識の財産を意識化するのがおつとめと言えます。

おつとめはいろんな意味があるけれども、今の話から言うとおつとめをして、普段は忘れてる、人間思案で人間同士であーでもないこーでもないと思つているのを、神—大自然—天然自然—生命—自分に向き合つて、あ、そうやった。あの経験があつたから今の自分がある。おつとめをするときに、その無意識を思い起こす、ということだと思ふね。

敵ではなく、敵のようになつて考える方

それで手短かに言いたいんですけど、教祖の教えのすごいところは、今の優理の話に合わせると、物の見方の変革、もの見方をガラツと変える。これを教祖は教えてくださった。僕は「世界観革命」と言つてるんですけど、世界観・もの見方を変えてくださった。

どういう風にかと言うと、私たちは何か嫌なこととか辛いことになると敵を作ります。こいつが悪いからこんなことに

なった。家族や社会が悪かったからこんなことになった。環境や境遇が良くなかったからこんなことになった。病気であろうと事情であろうと、敵がいて、敵のために自分は困っている。病気や問題、いやな人間という敵をやっつけないといけない、でも敵というのはなかなか手ごわいですから簡単にやっつけられません。返って自分がだんだんだんだん追い詰められ体の病気になったり心の病気になったり、それをまた敵のせいにしてしまう。

教祖の教えの素晴らしいところは、考え方の素晴らしいところは、敵がない、一切この世の中に敵はいない、もしも敵がいるとしたらそれは自分であって、相手を敵と考えるはいけなくて、あえて言えば敵のように考えたらいい。

スポーツに例えていつも言いますように、ちょうど今、すもうの中日ですね。上手になるためには、やっぱり相手がいるんです。強くなるためにはね。自分だけで練習してたら、実際にはそんなに強くない。自分の可能性を伸ばすためには、色々な相手に、突っ張りの上手な相手、四つ相撲の上手な相手、いろいろな相手にぶつかって、それを防戦しているうちに自分の可能性が、相手にも勝てるような可能性が出てきます。だから必ず相手がいるのですね。

スポーツは素晴らしい発明で、それまでは動物もみんな敵を相手にしてたんだけど、スポーツは敵のようになって自分を鍛える仕組みを作ったんです。お互い敵のようになって、敵じゃなく敵のようになり合って、練習したり試合したりして結果、自分が上手になったり強くなったり、よく自分が深められたり、高められたりしてる。

だから始まりと終わりにお礼をします。敵のようになってくださいね、お願いします、と。終われば、私を鍛えてくれてありがとうございます、と。と。と。これがスポーツの素晴らしいところです。

教祖もそういうふうに、スポーツのように相手は敵じゃなくて敵のようになってもらって、自分を変える、自分を成長させる。心の成人をさせてくれる相手になってくれるんですよ、と教えて下さった。そういうものの方見方にガラッと変える。

そもそも私が問題なんだけど、問題の自分はなかなか自覚できません、どこが悪いのかどこを直せばいいのか、どこをもっと成長させればいいのか、敵のようになってくれた相手が教えてくれたから、敵のようになってくれた人から学んで、私のここを成長させよう、そういうものの方見方。

争つと競つの違い

そうすると、教祖の考え方・ものの見方からすると、この世の中に争いはなくなる。全ての争いがなくなる、戦争はもとよりね、家庭の中の争いもなくなる。争いはなくなっても競いはなくならない。「争い」と「競い」は僕の考えでは違うのです。敵のようになってくれて戦うんです、競うからお互いが成長する。スポーツがまさにその通り。スポーツで練習もしない試合もしなければ、誰も上手にもならない。成長しません。あえて敵のようになってもらって競い戦って、自分を成長させる。だから僕は陽気ぐらしのレベルアップのためには競うという戦いが必要やと思うようになりました。争いはダメなんだけれども陽気ぐらしのレベルを高めるには敵のようになりあつて競い戦いあうことが必要で、それが前々から言ってる「対決すれども対立せず」という教祖のひながたです。

教祖は誰とも対立しない、どんな相手も敵だとは言わない、みんな全て可愛い我が子だ。でもじゃあ逃げたり、なあなあで妥協したりしたかというところじゃない。相手が、警察がやってきたり質問をしたりしたら、問い詰められたりしたら、ちゃんと堂々と答えられた。皇族がおられたという円照寺と

いうような、普通だったら恐れ多くてかしまつてしまうようなところへ連れられていっても、堂々と私の教えはこうですよ。親神様はこうですよというふうに対決された。

これが教祖の教えでつまり世界観革命だと私が考える理由です。これを私たちがまず身につけて世の中に広めていくというのが、私たちの教祖の教えとその実践ということだと思います。確かに実際には、むつかしい。競わないで争ってしまう。対決しないで対立ばかりしてしまう。

今度のコロナの問題もね、敵ではないんです。コロナは敵ではない、敵のようになってくれて、こんな状況の中でも僕たちがいかに陽気ぐらしのレベルを上げていくことができるかを僕たちは試されて、コロナに対応しながら人類が一層成人する。教祖の考え方からすればね、世界観からすれば、これが今僕たちに求められている、コロナにはそういう大きな深い意味があるということです。ありがとうございます

天理教教典学び

芝 優理

【第七章 かしもの・かりもの】

67頁1行目〜68頁6行目

しかるに、人は、容易にこの理が治まらないままに、あさはかな人間心から、何事も自分の勝手になるものと思い、とかく、己一人の苦楽や利害にとらわれて、一れつの和樂を望まれる親心に、もとの心を遣いがちである。親神は、かかる心遣いを、埃にたとえて、戒められている。

元来、埃は、吹けば飛ぶほど些細なものである。早めに掃除さえすれば、たやすく綺麗に払えるが、ともすれば積もりやすく、油断をすれば、いつしか、うずだかく積もりかさなり、遂には、掃いても拭いても、取り除きにくくなるものである。

よろづよにせかいのところみへたせど

あしきのものハさらさないぞや

一れつにあしきとゆうてないけれど

一 52

一寸のほこりがついたゆへなり
心遣いも、銘々に、我の理として許されてはいるが、親神の心に添わぬ時は、埃のように積もりかさなり、知らず識らずのうちに、心は曇って、本来の明るさを失い、遂には手もつけれぬようになる。かかる心遣いをほこりと教えられ、一人のほこりは、累を多に及ぼして、世の中の平和を素すことにもなるから、常によく反省して、絶えずほこりを払うようにと諭されている。

今から6年前、私は仕事中に心拍数が二〇〇ほどに上がり、息が出来ず、救急車で運ばれました。

過換気症候群という症状で、ストレスが原因と診断されました。そして、その日から恐ろしい日々が始まったのです。急に貧血になって倒れそうになったり、信じられないくらい動悸が激しくなったり。横になっている時でさえ、急に呼吸が乱れました。外に出るのが怖く、遂には、駅の階段を降りることすら恐怖に感じたほどです。

なにも考えず、当たり前のように息をしていた日々が嘘のようで、自分はどうなるんだろうと、常に呼吸と心拍数を気にするようになり、本当に不安な毎日でした。

その当時の私は、わがままで自分の思い通りにならないことにはすぐに腹を立て、自分のことは顧みず人のせいにして、暴言を吐きまくっていました。(今もあまり変わりませんが、笑) 埃が積もり積もって、自分の埃で窒息した状態でした。

しかし、そんな状態になっても、それが自分の心遣いからなっているとは考えもませんでした。過呼吸症候群？ストレス？そんなものではない。何か大きな病気なんだ。環境のせいだ、他人のせいだと。こんなにも助かる条件がそろっているのに…。

教会に住み、ひのきしんをしている姿を見ても、神様の話を聞いていても分からないなんて、本当にアホだなあと思いますが。今になってみれば、これが「あさはかな人間心」なんだなあと思います。

そんなある日、お世話になっていた人に『そうなのはあなたの自身の問題やろ。自分でちゃんと考えや。』と言われて、初めてハッと気が付きました。

ああ、これは人や物のせいにして逃げていただけで、ストレスでも病気でも何でもない。

全部自分の心遣いが原因だったんだと、ストンと心におちたのを今でも覚えています。

埃に埋もれた部屋の中で、鼻と口の部分がポカッと空き、やっと息ができた瞬間でした。それからの私は、積もり積もった埃を払い、助かるために必死で自分と向き合いました。とはいっても、どうしたらいいのかわかりません。

とにかく、おつとめをしようと、移動中や仕事中でも常におつとめとおさづけを心の中で、呟いていました。

すると、自然と今ある自分の体のありがたさを実感するようになったんです。

症状が出る前の元気だった体。当たり前のように瞬きや呼吸ができ、内臓が動き、寝ている時も休みなく働いてくれている体に奇跡を感じ始めました。『寝て起きて、目が見える、手足が動く、こんな凄いことがありますか。』という、三〇年以上聞いている教会長の話がやつと少し分かったのです。

一日を無事に、当たり前前に過ごせる自分の体に、本当に感謝するようになりました。

しかし、感謝やおつとめ以外に埃を払う方法って…ひのきしんは続かないし、人を助けるなんて自分にはもつての外。具体的に何をしたらいいのかわからない。

とにかく自分の心遣い、癖性を何とかしなければと思

ました。

すると、過去の行いを反省するようになったんです。自分の体の使い方や、人に対する態度や心遣い。なんて、浅はかな自分だったんだと恥じることが沢山ありました。

最初は、一つの物事を反省するだけでとても長い時間かかりました。まずは、自分の埃に気づくことです。人や物事を攻めて攻めて攻めまくって、やっと自分は何がいけなかったのかを反省するようになりました。

それを繰り返して行くうちに、心が体にとっても影響していると感じました。ある時、仕事で先輩に意地悪をされたことがあります。その瞬間、体中に血が駆け巡り、腸が煮えくり返り、ドクドクと頭に血が上りだす。なんとか怒りを収めようと呼吸に集中したとき、体の中の状態が変わったことに気づきました。

その時は、感動するぐらい本当に驚きました。そんなことも知らずに、怒りや感情のままに今まで過ごしていたなんて。

こんなことをしていたら、そら、体がおかしくなるわ。と納得し、いかに心の自由が難しいことか、体が自分のものではないかを実感した時でした。

それから、だんだんと素直に自分の行いや気持ちを変えていくようになりました。自分は、何がいけなかったのか、その反省にどう対して、自分がどう変わったらいいかまで考えるようになりました。そして、自分がどうすべきかを考えて、行動するようになりました。

それでも、絶えず埃が出る毎日です。今の生活に不満を感じたり、仕事ではいつも『この小娘め。このクソババア！』と罵ったり。つい最近も、積もった埃が自分の言動になり、人の好意を無にしていまいました。 “一人のほこりは、類を他に及ぼして、世の中の平和をみだすことになる” このことを実感しては、同じことを繰り返すばかりです。

しかし、絶えず反省し、次の行動を変えることで、少しずつですがマシな人間になってきたんではないでしょうか。病院に行ったのは、あの時、心臓の検査で行った一度だけ。気づけば症状も出なくなり、未熟ながらも御守護頂けました。そして、この経験は私にとって素晴らしいものとなったのです。

あの時、教会に住んでいなければ、あの人の一言がなければ、周りの人の助けがなければ、天理の教えがなければ…。

今頃どのような人生を歩んでいたのかと恐怖すら感じます。

“心一つが我がの理” という教えを身をもって、学ばせていただきました。今では、体のことを考えるだけでなく、自然の仕組みや働き、神様が作ったこの世界の一つ一つに感動するようになりました。

埃を出してはいけないのではなく、埃がでたら払いなさいという親心はあたたかく、天理教の中に生まれてよかったなあと思う今日この頃です。

これからも教えて頂いたこの経験を胸に、絶えず埃をはらい、本来の明るさを取り戻しながら、陽気ぐらしに向かいたいと思います。

聞いていただき、ありがとうございました。



はるのひ分教会 創立60周年記念

芝太七著『一日一回おさづけ』

読書感想文 大募集！



四六判・276ページ

本書は、当教会の芝太七初代会長が、昭和56年5月に道友社から出版した最初の本です。ここでは、初代の義父である芝甚之助翁の入信から、本人の入信、布教道中、教会設立にいたるまでが、教理を含めてわかりやすく書かれています。

つきましては、令和3年11月23日に迎える教会創立60周年の記念事業として、当教会所属に関わらず、広くお読みいただき、その読書感想文を募集いたします。ふるってご応募ください。

応募要項

- 1、『一日一回おさづけ おさづけとともに歩んだ三十年』（道友社刊）を、お持ちでない方は、道友社にてご購入ください（定価887円〈税込〉）。
※なお、教会、はるのひ詰所では特別価格 710 円、2 冊＝各 500 円、3 冊＝各 300 円にて販売いたします。（10 冊以上の多数希望の場合は教会まで）
- 2、文字数＝原稿用紙 1 枚（400 字）以上。※ファクス、Eメールで応募も可。
- 3、締め切り＝令和3年9月末日。
- 4、審査＝当教会内での一次審査を経て、直木賞作家・**出久根達郎**先生に最終審査をしていただきます。
- 5、賞金＝1等・5万円、2等・3万円、3等・2万円。

氏名、年齢、連絡先(電話番号、Eメールアドレス等)を明記のうえ、ご応募ください。

天理教
はるのひ分教会

〒530-0033 大阪市北区池田町 13-17
電話・ファクス 06-6358-2630
Eメール harunohi60@gmail.com

YouTube
「一日一回おさづけチャンネル」

右のQRコードから、またはスマホ、タブレットのYouTube・アプリから「一日一回おさづけ」を検索。



☆お知らせ☆

☆10月26日(月) 8時 本部秋季大祭(祭典後、登殿参拝できます)

☆10月29日(木) 18時 詰所祭

☆11月1日(日) 10時 女子例会

☆11月3日(火・祝) 女子おつとめ総会=中止(感染予防のため)

☆11月8日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしん・男子例会(詰所)

☆別席日 8時 教会出発

☆11月18日(水) 10時 女なりもの勉強会

☆11月22日(日) 前日準備ひのきしん、神名流し(夕つとめ後)

☆11月23日(月・祝) 11時 月次祭(春野享本部員ご巡教)

◇千人鼓練習 11月7日(土) 8日(日) 13時~16時

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分創り

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう！(毎月、25日までに申し込み)

- ・若い方=これからの人生の基礎固めとして
- ・年配の方=人生の美しい集大成のために